

聖書：Ⅱサムエル 24：1～25

説教題：主のあわれみは深い

日時：2019年5月26日（夕拝）

サムエル記の最終章、第24章。結びの章として、どんなに素晴らしいクライマックスが待っているかと期待するところですが、一読したところ、かなり私たちの期待するものとは違う印象を受けます。ここに記されているのは、またしてもダビデの罪です。そしてそのさばきが記されています。思わず戸惑ってしまうようなサムエル記の最終章です。まず書かれているのはダビデの人口調査です。ここを読む上で三つのことを押さえておきたいと思います。その一つ目は誰が悪いのかということです。当然ダビデが悪いのだろうと私たちは全体を読んで思いますが、気になるのは冒頭の1節です。そこに主がダビデをそそのかして、このことに向かわせたとあります。では悪いのは神なのか。さらに複雑なのは、これと同じ出来事を記している並行記事のⅠ歴代誌21章1節には「サタンがイスラエルに向かって立ち上がり、イスラエルの人口を数えるように、ダビデをそそのかした」とあることです。神とサタンとダビデ。この三者が関わっています。これをどう考えたら良いのでしょうか。

まず私たちは神に悪を帰すことはできないことを聖書から知ります。ヤコブの手紙1章13節：「だれでも誘惑されているとき、神に誘惑されていると言ってはいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれかを誘惑することはありません。」では問題なのは誰でしょうか。14節：「人が誘惑にあうのは、それぞれ自分の欲に引かれ、誘われるからです。」ここに問題は人間の欲にあることが示されています。確かに今日の箇所ではダビデはそう告白しています。10節で彼は「私は、このようなことをして、大きな罪を犯しました。」と言っています。神が私を誘惑したとか、他の何かが悪いとは言っていない。やはりこれはダビデの罪なのです。そしてそこにサタンが働いたというのも事実だったでしょう。彼こそ誘惑者です。彼がダビデの欲に働きかけ、罪の行いへ駆り立てた。では今日の1節はどう考えたら良いのでしょうか。ヘブル人の思想すなわち聖書全体に示されている思想の根底にある一つの考えは、主なる神がすべての事柄の背後におられる主権者であるというものです。この主のお許しなしには何事も起こらない。そういう意味ではこの出来事も主が良しとされたことであり、主が承認されたことと言えます。しかしそのことは、そこで行われた悪の責任は神にあるということにはなりません。神はご自身のあるお考えによって、罪人がその道を行くのをその

ままにされることがあります。それによってその人の罪が明らかに現われるようにされることがあります。しかしそれは神が悪いということではない。神は私たちには知り得ない深い御心を持っています。その御心をもってそこに関わり、事柄全体を導いておられます。言い方を変えれば今日の箇所はただダビデの罪とサタンの悪が記されただけの章ではないということです。そのただ中に神もおられて、どんなメッセージを語ってくださるのかを見て行くことが大切です。

二つ目はここで取り扱われているのはダビデの罪だけか、ということです。1 節に、主の怒りがイスラエルに対して燃え上がったとあります。具体的にイスラエルのどんな罪に対してかは書かれていません。そのイスラエルの罪を取り扱うにあたって主はダビデの罪を取り扱われるという形になっています。おそらくダビデの罪はイスラエルの罪と共通するもの、その代表となるようなものだったのでしょう。そこでそのダビデの罪を取り扱うことによって、主はより広くはイスラエルの国全体の罪を取り扱っている。ですから後にイスラエルに多数の死者が出ますが、それはダビデ一人の罪の犠牲になったわけではないのです。主はダビデとイスラエルの両方の罪を扱っているのです。

そして三つ目は人口調査することそれ自体が罪なのではないということです。もしそうであるなら、2 回にわたる人口調査が記されている民数記は聖書から即刻削除されなければなりません。おそらくダビデの罪は人口を数えることから来るプライドや高慢、人間的な誇り、あるいは自己満足と関係していたのだと思います。3 節を見るとヨアブもダビデの今回の行動に反対しています。ふさわしくない思いがダビデの内にあることを感じ取っています。しかしダビデは周囲の反対を押し切って調査を断行しました。そして9 節で登録人数についての報告を受けます。その時に彼は自分の内に正しくない思いがあったこと、それは大きな罪であることを認めるに至ります。こうしてサムエル記の最終章で見るのもダビデの罪です。私たちとしては素晴らしい結論を期待したいところですが、あのダビデも私たちと同じ罪人の一人であった。どんなに素晴らしい人でも、このような弱さが地上にあっては付きまとうことを、この 24 章は私たちに改めて思い起こさせてくれます。

しかし彼から学ぶこともあります。それは迅速な悔い改めです。彼はここで自分の罪をごまかそうとしていません。誰でもこの程度のことは・・・などとは言いません。誰かに責任転嫁したり、ましてや神のせいにするようなことはしていません。彼は良心の

咎めを感じた時、即座にそれを認め、正直に主に告白して、御前にへりくだる人でした。ある意味でダビデの素晴らしさはここにあったと言っても良い。後々の王たちが見習うべき模範がここにあったのです。

この結果、ダビデは預言者ガドを通して、次の三つの内どれを選ぶかと言われます。7年間の飢饉か。3か月間、敵に追われることか。あるいは3日間、国に疫病があることか……。皆さんならどれを選ぶでしょうか。どれもこれも大変です。もう少し別のオプションはないものでしょうかとうめきたくなります。しかしここにも注目すべきダビデの信仰があります。それは14節です。「それは私には非常に辛いことです。主の手に陥らせてください。主のあわれみは深いからです。」彼はこの答えによって、どれが一つを選んでいたのか、あるいはどれにするかは主に委ねたのかは議論があるところです。しかし注目したいのは、この場面でも彼は主のあわれみに信頼していること。これは決して図々しい期待ではありません。神はあわれみ深いと言って罪を軽く考え、神を侮るあり方とは違います。彼は犯した罪のためにさばきは逃れられないと知っています。苦しみを刈り取るのは当然と覚悟しています。先の三つのオプションを聞いて、どれもこれも重過ぎるなどと文句を言ってはいません。裁きは受けざるを得ない。しかし彼はなおそこでも、主はあわれみをもって取り扱ってくださる方だと見上げていました。これはダビデが主を良く知っている人であったことを示しています。神は罪に対しては非常に厳しい方ではあるが、同時に悔い改める者には驚くべきあわれみを注いでくださる方である。彼はそのような主を見上げて真剣に悔い改めたのです。憐れみの主に希望を置いて正直に罪を告白し、主がくださる導きを待った。これは私たちが自分の罪に愕然とし、絶望した時、主をどのように見上げて希望を抱くべきか、模範を提供してくれるものと言えます。

さて結果はどうだったでしょうか。15節にあるように、主は疫病を下したため、7万人が死にました。厳しいさばきがイスラエルに臨みました。しかし16節に主はわざわいを下すことを思い直したとあります。民を滅ぼす御使いに「もう十分だ。手を引け。」と言われます。ダビデが信じた通りです。しかしただそれで終わりになるのではないというのが18節以降です。主は預言者ガドを通して18節でダビデにこう言います。「上って行って、エブス人アラウナの打ち場に、主のために祭壇を築きなさい。」そしてそこでいけにえをささげるように命じます。すなわちここに示されていることは、罪の赦しには犠牲が必要であるということです。何の代償もなしに罪が赦されるのではない。

身代わりが必要です。いのちが注ぎ出されることが必要です。これが神の方法です。

ダビデは主の指示に従ってアラウナの打ち場に行き、代金を払ってその土地を買い、そこに祭壇を築きます。そして全焼のいけにえと交わりのいけにえを献げました。このことを経て主はこの国の祈りに心を動かされ、イスラエルへの罰は終わりとなったと最後の 25 節に記されています。このことを読むだけでも私たちは主のあわれみについて多くを学ぶことができます。これはすべて主が指定されたことです。主がダビデとイスラエルを赦すための道を備えてくださいました。その神が指定した方法に従った時、彼らに対する罰は終わった。その罪は赦され、神との交わりが回復され、イスラエルは神の祝福の内に歩む者とされたのです。

しかしこのサムエル記を最初に読んだ読者たちはもっと驚くべきメッセージをここに読み取ったに違いありません。今日の説教の冒頭で、今日の箇所と全く同じ出来事を記している平行記事があることを申し上げました。I 歴代誌 21 章です。そこを見ると今日の章ではアラウナと記されている人の名前が、そちらではオルナンと記されています。これは発音の仕方の違いで、同一人物です。ダビデはオルナンの打ち場に祭壇を築いたのです。そしてさらに後の II 歴代誌 3 章 1 節を見ると何と書いてあるでしょうか。「ソロモンは、エルサレムのモリヤの山で主の宮の建築を始めた。そこは、主が父ダビデにご自分を現され、ダビデが準備していた場所で、エブス人オルナンの打ち場があったところである。」すなわちここは後にダビデの子ソロモンによって主の神殿が建てられた場所だったのです。またここはモリヤの山すなわち創世記 22 章でアブラハムがイサクをささげた山でもあったのです。これまで読んで来たサムエル記はソロモンの死後、イスラエルが南北に分かれた後に記されたものであることが、例えば I サムエル記 27 章 6 節などから分かります。すなわちサムエル記の最初の読者たちはソロモン神殿を知っていた人たちです。その人たちが今日のサムエル記最終章を読んだら何を思うでしょうか。それはこのアラウナの打ち場に、エルサレム神殿が建てられたのだ！ということでしょう。つまり神はここで何の考えもなくアラウナの打ち場を指定し、そこでいけにえをささげよと言っていたのではなかった。このアラウナの打ち場はダビデとイスラエルの罪のために必要となった場所です。その場所が何と神が豊かにご自身の臨在と栄光を現してくださる聖なる神殿の場所となった。いけにえをささげて神との交わりが豊かに回復される場所となった。神は我々とともに住み、豊かに私たちに祝福してくださる場所となった。とするなら、このサムエル記最終章は最初に読む者たちにとって大い

なる慰めと希望を与える章だったのではないのでしょうか。しかもそこはかつてあのアブラハムに神が現れ、大切なメッセージを示したところでもあります。神が驚くべき知恵とご計画をもってすべてを恵み深く導いてくださっているということに、最初の読者たちも今日の私たちも深く心打たれずにいないことではないのでしょうか。

今日の私たちにとって今日の章は何を意味するのでしょうか。それはもはや説明の必要もないことと思います。旧約時代の神殿はやがてのイエス・キリストを指し示しています。神殿では罪の赦しのために多くのいけにえがささげられましたが、イエス・キリストはただ一度限りご自身の聖い無限の価値を持ついのちをささげてくださいました。そのイエス・キリストの身代わりの犠牲を通してこそ、私たちの罪は神の御前に赦されます。また神との交わりは豊かに回復されます。ですからこのアラウナの打ち場へ上って行け！との主の指令は、今日の私たちにとってはイエス・キリストのもとへ行け！という命令に他なりません。このアラウナの打ち場は神が指定した場所です。神がこの赦しのための道を備えてくださいました。同じように神は私たちの救いの道としてイエス・キリストのみを定めています。その主のあわれみの方法に従う時、私たちに対する主の罰も終わりとなる。私たちは赦され、神との豊かな交わりの中を歩む者とされる。このあわれみ深い主に信頼して、あなたがたもこの希望ある歩みへ進むように！とサムエル記最終章もまた私たちを力強く駆り立て、励ましてくれるのです。